



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

高等学校音楽の歌唱表現における理解：  
文化的・歴史的背景を意識した授業の展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 居城,勝彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/159392">http://hdl.handle.net/2309/159392</a>

# 高等学校音楽の歌唱表現における理解

— 文化的・歴史的背景を意識した授業の展開 —

東京学芸大学附属高等学校 居 城 勝 彦

## 目 次

1. 研究の目的と視点 .....	134
2. これまでの実践と本実践の視点 .....	134
2. 1. 生成のカリキュラムから考える本実践の視点 .....	134
2. 2. これまでの実践 .....	135
2. 3. 本実践の位置づけ .....	135
2. 4. 司書によるブックトークの活用 .....	135
3. 本実践の展開 .....	136
4. 学習者の意識 .....	137
5. 結語 .....	138
5. 1. 生涯学習への接続としての考察 .....	138
5. 2. 今後の課題 .....	139
引用文献・脚注 .....	140

東京学芸大学附属学校 研究紀要 第 47 集

# 高等学校音楽の歌唱表現における理解

— 文化的・歴史的背景を意識した授業の展開 —

東京学芸大学附属高等学校 居 城 勝 彦

## 1. 研究の目的と視点

音楽科では、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情とともに音楽に対する感性を豊かにすることを大切にしている。表現の中には歌唱と器楽の活動が含まれているが、これらを通して曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身につけるようにすることが求められている。

歌唱表現に関してみると、これまではその楽曲を歌えること、さらに演奏を通して知覚・感受される曲想や音楽の構造をいかして歌唱表現を工夫することに主眼を置くことが多かった。新学習指導要領では歌唱表現に関する技能面での習得だけでなく、曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解する知識の習得に関するものも重要であるとしている。

では、歌唱表現において「理解する」とは、何を指しているのだろうか。

高等学校学習指導要領解説<sup>1)</sup>によれば、曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わりを理解することは、単に楽曲の形式を覚えること、成立背景のエピソードを知ることにとどまらず、自己のイメージや感情と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わりを捉え理解することを指している。また、音楽の多様性について理解するとは、人々の暮らしとともに音楽文化があり、そのことによってさまざまな特徴を持つ音楽文化が存在していることを理解することを指している。

本研究では、以上のような歌唱表現における理解に関して「文化的・歴史的背景などとの関わりを捉える」として、「人々の暮らしとともに音楽文化がある」ことを視点とし、これらをふまえた活動に取り組む。そうすることで、生徒の中で音楽を愛好する心情とともに音楽に対する感性を豊かにすることが実現すると考えていく。

## 2. これまでの実践と本実践の視点

### 2. 1. 生成のカリキュラムから考える本実践の視点

デューイの哲学に基づく生成の原理から導出した音楽カリキュラムでは、従来の演奏中心や構造・概念中心の音楽科カリキュラムでは反映されなかった芸術としての音楽の本質である「質」を認識対象としている。このカリキュラムでは、音楽科の指導内容（形式的側面・内容的側面・文化的側面・技能的側面）を、

「人と地域の音楽」 : 音とのかかわり、風土・生活・文化・歴史

「音楽の仕組みと技能」: 形式的側面・内容的側面・技能的側面

「音楽と他媒体」 : 音・言葉・動き・総合的な表現

という3つの範囲からカリキュラムとして編成している<sup>2)</sup>。

これまで西洋音楽や西洋音楽由来の音楽では、形式的側面と並行しながら技能的側面をつけることを指導内容の主体とし「音楽の仕組みと技能」を範囲として活動を展開してきた。しかし、本実践では西洋音楽も人々の営みの中で生まれた音楽であるという文化的側面を技能的側面とともに指導内容の主体とし、「人と地域の音楽」を範囲としてとらえようと試みた。

## 2. 2. これまでの実践

筆者自身はこれまで、文化的・歴史的背景を考える題材として「世界の諸民族の音楽<sup>3</sup>」や「日本の伝統音楽<sup>4</sup>」を取り上げ、生徒に提示してきた。それは、日頃あまり触れることのない音楽、あるいは触れる機会があっても着目して考えることを十分にしていない音楽に生徒の目を向けさせ、そこでの気づきをもとに音楽に対して新たな意識を持つことを期待していたという意図があった。そして提示した音楽と生徒の内にある音楽とを比較し、その差異に着目し、それが文化相対主義的な視点にたつて捉えられるような単元展開を意識してきた。しかし、これらの単元は実施時期や他の単元との関連から、カリキュラムの中で連続性を持たせにくく、トピック的になる傾向は否めなかった。

## 2. 3. 本実践の位置づけ

そこで生徒が音楽の授業の中で最も触れることの多い西洋音楽由来の音楽で文化的・歴史的背景に迫る歌唱表現の活動を試行した。これは、生徒がこれまでの生活の中で触れることの多かった西洋音楽そのものや西洋音楽由来の音楽も、成立背景には文化的・歴史的背景などとの関わりがあり、当時の人々の暮らしとともに音楽文化があったこと、そして自分たちの生活の中にもある音楽文化を再認識してほしいと考えたからである。また、このような題材で単元を構成することで、カリキュラム上で他の時期に実施する単元との連続性も図れるのではないかと考えた。

本校では卒業式・入学式で祝歌として1年音楽選択者全員とオーケストラ部・合唱部で演奏をしている。このような学校行事での演奏発表の機会は、昭和40年代から約半世紀にわたって続けられている<sup>5</sup>。現在では、「大地讃頌」とヘンデル作曲オラトリオ「メサイア」から「Hallelujah」を演奏している。1年3学期の授業で取り組む「Hallelujah」は、式典のための合唱曲を仕上げるといふ演奏表現のみを目標とした活動にはしていない。混声四部合唱の歌唱表現に取り組むことと並行して、ギリシャ・ローマ時代から現代にいたる西洋音楽史の流れの中で、作曲家ヘンデルの活躍したバロック時代の音楽を俯瞰し、楽曲の音楽的特徴に触れている。また、同じバロック時代を代表する作曲家であるバッハと比較し、作風の違いや社会的立場、活躍した地域の違いなどにも触れている。さらに当時の社会情勢や人々の生活、美術や文学といった他の芸術の特徴、同じ時代の日本がどのような時代だったかについて文化や人々の生活について触れ、多角的な理解を深めることとした。そうすることで、歌唱表現を追究することに留まらず、演奏を通じた音楽文化への理解を深めることが可能となり、生涯にわたって音楽を愛好する素地をつくることに繋がるだろうと考えている。

## 2. 4. 司書によるブックトークの活用

多角的な理解を深める方策として、学校図書館司書によるブックトークを活用した。本校のような在校生が1000人規模の学校でも音楽の専任は1名である。生徒にとって、学校の中で音楽のことを知りたいと思ったときに、音楽の教員以外に相談できる専門家としての図書館司書の役割は大きいと考えている。

授業では合唱練習の進行具合に合わせ、音楽史の流れの中でバロック時代についてオペラの発展と器楽の進歩について学んでいる。さらにバッハとヘンデルに着目し、その作風や代表的な作品を紹介して、同時代の作曲家を対比させながら触れている。さらに、合唱が出来上がるころに合わせて、学校図書館司書によるブックトークを取り入れている。音楽教員からはブックトーク依頼の際に、ヘンデルの活躍した時代の生活様式、美術や文学などの他の芸術について触れる内容にして欲しいと伝えている。

ブックトークでは、まずヘンデル自身が作曲家であると同時に外交官としての一面も持っていたことを紹介し、商業改革の時代でヨーロッパが拡大してしたこと触れている。さらに、トマス・ゲインズバラの肖像画とオースティンの文学作品から当時の市民階級の人々の生活を想像させた。ここで紹介された内容から、ヘンデル

の活躍した時代が想像よりも昔のことではないと感じた生徒もいた。また、ヘンデルが活躍した時代は日本では元禄、享保時代にあたり、ロンドンと同じように江戸が市民社会として円熟した時期であることに触れ、当時の江戸文化の中には現在につながるものもあると紹介した<sup>6</sup>。

### 3. 本実践の展開（全12時間）

本活動は1年生対象の芸術科選択必修科目「音楽Ⅰ」の3学期の活動である。目標は「文化的・歴史的背景を知り、楽曲への理解を深め、歌唱表現にいかそう」と設定した。

展開は以下の表の通りである。第1次の授業ではパートの音とりや楽曲の構成要素を意識した合わせを行うだけでなく、音楽の時代様式や楽曲の特徴、作曲者についてなどに触れている。第2次の授業では、各パート1人ずつの4重唱で演奏の完成度を上げることと、図書館司書によるブックトークで当時の社会の様子や他の芸術作品・文学作品、同時代の日本の様子などに触れ、生徒の領域横断的な理解を深めることを目指している。第3次は卒業式・入学式の直前練習と本番を合わせ、それぞれ2時間分の授業としている。講堂でオーケストラと合同で練習し、祝歌の演奏に取り組んでいる。

	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
第1次 第1時 第2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バロック時代の音楽について理解する。</li> <li>・ダカーポアリア「私を泣かせて下さい」（ヘンデル作曲）を斉唱する。</li> <li>・「Hallelujah」をDVDで鑑賞する。</li> <li>・4パートに分かれて音取りをする。</li> <li>・合唱で通奏する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西洋音楽史の学習の一環として、中世との音楽の共通点と相違点を意識できるように説明する。</li> <li>・ダカーポアリアを歌唱することで、当時の音楽様式について演奏を通して理解する。</li> <li>・細部よりも曲の全体像をつかむ意味で授業最後に、合唱で通奏をする。</li> </ul>
第3時 第4時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4パートに分かれて音取りをする。</li> <li>・和声的な進行の部分を中心に音の重なりを意識する。</li> <li>・合唱で通奏する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的には自分たちで練習をするが、必要な部分では積極的にアドバイスやピアノ伴奏を担当する。</li> <li>・曲の構成を意識できるように、和声的な進行や終末部分のアーメン終止（IV→I）の連続がもたらす効果について気づかせる。</li> </ul>
第5時 第6時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オラトリオ「メサイア」について知る。</li> <li>・4パートに分かれて練習する。</li> <li>・対位的な部分を中心に旋律の重なりを意識する。</li> <li>・合唱で通奏する。暗譜を心がける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作曲者ヘンデルの生涯と「メサイア」の作品構成について概説する。</li> <li>・旋律の重なりを意識できるような授業展開を心がける。</li> <li>・本番に向けて暗譜での演奏を意識させる。</li> </ul>
第2次 第1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブックトークでヘンデルの活躍した時代について知る。</li> <li>・各パート1人ずつで4人組を作り、練習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽室でのブックトークは2単元目である。書籍からの知識だけでなく、司書の言葉を生徒に受け止めてほしい。司書の話に合わせて画面で書誌情報やキーワードを示す。</li> <li>・4重唱にすることで各自の練習が必要な部分が明確となる。必要に応じてパート練習も取り入れ、安心して歌える環境を用意する。</li> </ul>
第2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各パート1人ずつで4重唱する。</li> <li>・「Hallelujah」を初回と違うDVDで鑑賞する。</li> <li>・バッハとヘンデルの生涯を比較する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実技テストをかねる。互いの演奏に対してコメントする用紙を配布し記入させる。</li> <li>・会場が一体となって「Hallelujah」を合唱しているDVDを視聴させ、卒業式での自分たちの姿をイメージさせる。</li> <li>・同時代に活躍した作曲家だが、作風や環境が全く違ったことに気づかせる。</li> </ul>
第3次 第1時 ～ 第4時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業式、入学式で祝歌として演奏する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「威風堂々」「国歌」「校歌」「大地讃頌」「Hallelujah」を在校生代表として演奏することを意識させる。</li> <li>・オーケストラとの共演を存分に味わわせる。</li> </ul>

#### 4. 学習者の意識

本実践に関しては、単元を通して毎時間の学習感想を継続記録するカードを用意した。そこに記述された学習感想から変容が読み取れるものを、以下にまとめる。

「一番驚いたのは、ヘンデルが外交官でもあったことだ。音楽家というどちらかというと内向的な、あまり他人とは積極的に関わらないイメージがあったので、とても社交性のある外交官という職と音楽家という2つの側面に意外性を感じた。」

「ヘンデルが音楽家で外交官だったことに驚いた。3つの選択肢で一番音楽に関係ないように思った。いろんなものに触れて音楽につなげていたのだろうか。」

ヘンデルの外交官としての側面をブックトークの中でクイズ形式を用いて紹介した。生徒の中にある“芸術家”や“作曲家”の概念が垣間みられる場面でもあった。

「時代背景を学ぶことで「Hallelujah」が身近にかんじられた…ような気がする。」

「ブックトークではヘンデルの意外な一面を見れて良かった。「Hallelujah」のつくられた時代がよくわかって、かなり「Hallelujah」のイメージがわいた。」

自分たちが演奏する「Hallelujah」に対して、楽譜から音楽的要素を理解するだけでなく、時代背景を知ることから、より曲のイメージを鮮明に描くことができるようになっていくことがわかる。

「作曲家以外にも絵画のお話などが聞いて興味深かった。音楽の歴史は作曲家本人のことだけでなく、その家族や時代背景が大きく関わっている。その1つ1つの要素を考えることで、音楽への理解が高まるのだと思う。ブックトークはその方法の1つであり、もっとじっくり聞いてみたいと思った。」

「ブックトークは自ら調べたことがなかった内容でとても興味深かった。紹介された本を読みたいと思うと同時に、ヘンデルの人物像が私の中ではっきりして面白かった。」

「(ヘンデルの時代が)「高慢と偏見」の時代だったのが意外だった。前から読みたいと思っていたので、これを機会に読んでみたいと思った。」

「バロック時代について音楽以外の側面、ましてや江戸のことと関連づけて学んだのは初めてだった。」

「バロック時代が音楽史にとってどれほど重要な役割を果たしていたのかがわかった。楽譜が刷られるようになって人々が手軽に音楽に親しめるようになったのがこの時代で、今の音楽と人々の密接な関わりの原点となっているのだと気づいた。」

「音楽でのブックトークはいつも面白く、「Hallelujah」について少し詳しくなった感じで嬉しかった。」

「ヘンデルが活躍した時代は商業革命が起こっていた時代であり、文学・貿易・音楽どのジャンルにおいても活動が盛んになっていた時代であることもわかった。また、身分の低い人が貴族を風刺するようなエネルギーのあった時代であることもわかった。身分の差に関係なく世界共通で広がっていた音楽という文化をこれからも大切にしたいと思うようなブックトークだった。」

当時の人々の生活と結びつけることによって、バロック時代をイメージしている様子がうかがえる。これらの感想からは、音楽文化が人々の暮らしの中にあったという視点を持つことに繋がり、楽曲やヘンデルと自分との距離が近づいてきていることが読み取れる。

「ヘンデルの生い立ちを知ってから歌うと、より歓迎の気持ちを込めて歌えた気がした。」

「喜びや共感を呼ぶ人間賛美であるということがわかったので、卒業式を意識して気持ちを入れて1回1回丁寧

に歌いたいと思う。」

「なぜ「Hallelujah」を学校で歌うのか？ - 人の背中を後押しする音楽、喜びを与える、共感を呼び、人を励ます。」

「ヘンデルなどが活躍した時代と現代では音楽家の活動の形には違いがあるのだとわかった。」

「ヘンデルが生きていた時代を知ると「Hallelujah」に対しての印象が変わった。当時、芸術が興隆していたと知り、その時代に生きていたら、と思った。ピアノではバッハに比べて弾く機会が少なかったが今後弾こうと思う。」

自分や自分たちにとって「Hallelujah」を演奏することがどのような意味を持つのか、ブックトークを通して触れた作品に対する批評の言葉から理解しようとしていることがわかる。また、ヘンデルへの理解を深め、他の作品に対して関心を持っている姿も読み取れる。

これらの学習感想から、「Hallelujah」に関する表現の技能的側面が高まったことを直接読み取ることはできない。しかし、楽曲の成立背景に意識を向ける面白さ、作曲者自身の知らなかった一面に触れる驚き、ブックトークそのものへの興味関心、新たな視点から楽曲を捉えることに関する気づきなどが読み取れる。これは、ブックトークにより生徒の知的好奇心が刺激され、楽曲への関心が高まっていることに他ならない。卒業式や入学式での演奏そのものの評価が以前に比べて向上したと単純に言い切ることはできないが、楽曲の魅力に気づき、演奏に向けて自分なりの意義を見だし、より意欲的に歌唱表現に取り組む姿に繋がっていることは明らかである。

そして、その演奏に触れた人々が、生徒が演奏に際して見いだしていた意義を感じ取ってくれているならば、生徒にとって一連の学習活動が結実していたことになるだろう。この経験により、彼らがこれからの人生で出会う音楽を成立背景や文化的・歴史的背景を多角的に捉えることが楽曲をより深く理解する喜びを知る活動となったととらえられるだろう。

## 5. 結語

### 5. 1. 生涯学習への接続としての考察

高等学校学習指導要領芸術編において、音楽Ⅰの目標では「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力」を育成することを目指している。音楽文化との関わり方は演奏表現だけではない。鑑賞活動や創作、成立背景の理解なども含まれている。学習活動で触れる音楽がさまざまな時代や地域のものであれば、活動を通して理解することもより豊かになるだろう。さらに、音楽は音楽だけで完結しているわけではない。その時代の社会背景や他の芸術分野との関連も深いことは明らかである。このような音楽に関する多角的理解の方法を高等学校段階までに身につけていれば、生涯にわたり音楽を愛好する心情とそれを支える音楽的理解を助けるものになると考えられる。

小川<sup>7)</sup>は、プラクシス（人間の日々の生活や環境を向上し、変容させるための行動的省察および省察的行動）としての音楽の3つの特徴として、

「音楽は第一義に人間の社会行為である」

「音楽は常に進行形であり、非言語的・身体的である」

「音楽の価値は相対的である」

を挙げている。さらに、プラクシスとしての音楽の視点からみた音楽教育としての特徴を下記の3点にまとめている。

- ・音楽行為（演奏・聴取・作曲・即興などのあらゆる音楽活動を含む）が何より重要視される。
- ・カリキュラムが柔軟なものになる。

・音楽授業などの学習は、指導者と学習者および学習者間の共同・協同作業となる。

音楽行為を主軸とした授業展開であっても、生徒が楽曲の理解を深めたり広げたりするために文化的・歴史的背景について触れられる柔軟なカリキュラムが必要であり、そうすることが生徒の変容をうながすために効果的であると考えられる。

また、上田<sup>8</sup>は「憧れの再近接領域（Zone of Potential Confidence:ZPC）」という概念で、自分ひとりで実現するのは難しいけれど、あの人とだったら「憧れ」に到達できるかもしれないと思えること、誰かと一緒だからこそ生まれてくる自信のようなものがあるのではないかと述べている。音楽行為をくり返す中で、生徒自身がこのような手応えを得ることが重要である。そして、これこそが学校音楽教育でふんだんに経験されている、合唱や合奏という音楽行為を通して培われているものであろう。

以上の点から生涯学習への接続を考えると、仲間とともに表現活動に取り組む生徒たちの容相をとらえながら、それぞれの段階に相応しいと思われる鑑賞や知識理解の内容を、活動に寄り添う教師が柔軟な音楽性で生徒と接しつつ、その多様性を受け入れた上で互いの価値を認め合えるような場を設定することが重要である。活動における個人にとっての価値はさまざまであり、優劣がつけられるものではないことを教師自身が強く自覚する必要もあるだろう。

## 5. 2. 今後の課題

音楽の時間において、知的好奇心の高い生徒たちが表現活動に求めているものは何であろうか。音楽そのものに浸る時間であることは間違いない。試行錯誤や練習を繰り返しながら、より心地良い演奏を目指している姿、これまで接したことのない音楽文化に触れ興味関心をそそられている姿は音楽室でよく見かける姿である。音楽室以外での学習や学校生活と空間的に切り離された音楽室での活動は、生徒たちにとって魅力的なものであろう。その中でも多くの時間を使い、表現活動をしている西洋音楽に、文化的・歴史的背景の理解を加えるだけでなく、当時の人々の暮らしも想起させるような学習過程をとることは、生徒の音楽的経験が知識と結びつき、より横断的な学習活動となるために重要である。

久保田慶一<sup>9</sup>は、子どもたちが音楽作品と「個人的に大切なつながり」を持つためには、その目的を達成するまでのプロセスが大事であると述べている。このプロセスを「探索の旅」と呼び、決して児童・生徒に迎合することなく、音楽作品に固有な方法で、旅を楽しいものにしていかなくてはならないとも述べている。探索の旅は楽しいものでなくてはならないが、ただ面白おかしければいいという訳ではなく、事前に綿密な計画を立てておく必要がある。プロセスと結果のいずれに焦点を当てるか、そのバランスが大事であるとしている<sup>9</sup>。この考え方こそ、楽曲の演奏に関して技能的側面の学習に偏りがちだった西洋音楽を、他の音楽と同じようにその成立背景を多角的にとらえる学習活動を構想するには必要な視点である。

本実践では、「行事における祝歌の演奏」が教科学習の結果としてとらえられるだろう。もし、その出来映えを他者から評価されることに生徒が重きをおいていたとしたら、本実践は生徒が音楽を愛好する心情とともに音楽に対する感性を豊かにすることの実現には不十分だと考えたい。行事において大勢で演奏することの自分なりの意味を見いだしていたり、バロック時代の芸術作品に触れてみようとしたり、新たに出会う音楽作品の成立背景やそれを生み出した人々の暮らしに想像を巡らせたりする姿が見られたとすれば、本実践は生徒が音楽を愛好する心情とともに音楽に対する感性を豊かにすることの実現に近づいたと言えるだろう。現段階では、生徒の学習感想から実現の姿を読み取ることや、その後の音楽の授業において祝歌演奏の手応えが今の音楽的活動を支えているととれる場面からの評価となっている。今後は、一連の音楽の学習活動の評価を生徒と授業者の双方がおこない、次の活動に繋げていけるような評価の在り方とそれが実現できるようなカリキュラムの作成が課題であらう。



## 引用文献・脚注

- 1 高等学校学習指導要領解説芸術編（2018）文部科学省。
- 2 溝口希久生（2017）「生成の原理による音楽カリキュラム」『学校音楽の理論と実践をつなぐ 音楽教育実践学事典』日本音楽教育実践学会編，音楽之友社。
- 3 音楽Ⅰにおいて，サンバやカポエイラを取り上げ，鑑賞や表現活動だけでなく，それらの文化の成立背景や現在のブラジル文化について触れている。
- 4 音楽Ⅰにおいて，能「高砂」「船弁慶」を取り上げ，鑑賞や表現活動だけでなく，江戸時代の式楽としての能の役割や，装束・能面・舞台などの芸術性について触れている。
- 5 田中正雄（2008）「合唱曲『Hallelujah』の指導と式典合唱の実践」東京学芸大学附属高等学校研究紀要45集。
- 6 15枚の画面を音楽担当教員がプロジェクターで示し，司書がブックトークを行った。生徒にはメモしたいものが自由に記入することができるようなワークシートを用意した。
- 7 小川昌文（2015）「「マイミュージック」を育て、培い、養う音楽授業—授業をクリエイトするために不可欠なもの—」音楽教育実践ジャーナル vol.12 No.2，日本音楽教育学会。
- 8 上田信行（2009）「プレイフルシンキング 仕事を楽しくする思考法」，宣伝会議。
- 9 久保田慶一（2019）「ティーチングアーティストのスキルを活用する」『新しい音楽鑑賞：知識から体験へ』水曜社。